

玄宮楽々園概要

日本庭園は、伝統文化の多くの場合と同様に、6世紀初めに中国文化の影響を受けつつ適合させ受け入れられてきた。6～10世紀まで、日本の政府は唐王朝（618-907）を直接モデルにしており、我が国の政府の高官たちは、きらびやかな中国の宮廷文化をさらに見習おうとして、しばしば中国風の庭園を建設した。この後、日本庭園はさまざまな主調と様式で作られてきたが、中国の美学は富と階級の指標として受け入れてきた。

江戸時代の初め（1603-1867）、庭園は主に2つの目的を持っていた。茶室の近くの付属物として愛でる視覚的部分と、庭の何か所の場所から観賞できる一連の景観を備えた、散歩のための場所としての部分である。これら双方の機能はともに客人を楽しませるのに役立った。これらの回遊式庭園は、多くの大名たちの邸宅にとってなくてはならないものになった。庭園は通常、池、または水がある場所を中心として、有名な場所の忠実な模型であり、また道教の教えも含まれていた。たとえば、玄宮園には、中国の伝説の場所を象徴するいくつかの要素が含まれている。そのひとつは中央にある島で、不死伝説の島、蓬莱を表わしている。

玄宮園は、何世紀にもわたるその歴史の中で様々な形で存在してきた。この庭園は、井伊直興(1656-1717)の邸宅の一部として 1677 年に建てられたと考えられている。当時は槻御殿（けやきごてん）と呼ばれ、すでに庭の中央に広大な池水があった。19世紀初頭、庭園の一部は、藩主の井伊直中（1794-1850）が私有庭園を作るために併合された。この増設された建物は楽しむ意味する漢字「楽」を二つ並べ「楽楽園」と呼ばれた。それは庭園の池の内なる景色と庭園の外景色である近くの山々の両方が見られる「楽しさ」を表現したものである。庭の中に遠くの山（もしくは城）の“景色を借りる”この手法は「借景」と呼ばれ、日本と中国の庭に見られるものである。1997年に始まった玄宮園の復元工事は、1812年の楽楽園の創建時の庭の図面に基づいて大幅に修復された。